
とある狭間の観測黒猫

ユーシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある狭間の観測黒猫

【Nコード】

N1783Y

【作者名】

ユージン

【あらすじ】

超能力が一般科学として認知された、学園都市。そんな場所でも学生達の間では都市伝説が噂される。どんな能力も効かない人間、空を舞う円盤、使っただけで能力が上がる道具、そして……。空の少女がその一つに触れた時、とある少年との物語が始まる。

黒猫と青い円盤、そして赤兎（前書き）

初めまして、ユーシンという者です。

こんな小説に興味を持っていただけて嬉しいです！
再スタート、ということでストレートを目標に頑張ります。

黒猫と青い円盤、そして赤兎

私には何か足りない。それはお金でも時間でもないし、友達でも成績でもない。

十分というわけでもないけれど周りの人と変わらない程度には揃っているつもりだ。

顔にも身長にも特にコンプレックスはないし、運動神経が悪いわけでもない。

普通の女子高生と胸を張っていえる。張れるほどのものでもないが、ちなみにそれはコンプレックスではない。本当に。

とにかく十分普通なのに……彼が気になって仕方が無いのは、彼がそれを知っているからだろうか。

〈とある狭間の観測黒猫〉

黒川瑞希は暗がりの道を持てる全力で走り続けていた。ポニーテールを乱暴に揺らし、スカートからシャツを振り出しながら走る。買い物袋は、どこかで放り投げてしまったが今はそれどころではない。今日の夜ご飯よりも今のほうが重要だ。

「私が何したつてのよー!？」

彼女の背中を少し後ろから追いかけるのは人ではなく青い円盤。直径は黒川と同程度、まるでCGグラフィックのような色や光沢はどこか現実味のない浮いた印象を与える。

黒川は何故追われているかは把握していないが、何に追われているかは知っている。

都市伝説。それも最近流行りだしたもので、彼女自身詳細を聞いたのはちょうど昨日だ。後ろから回転して迫ってくるあの円盤の縁はバツクリ開き、見た者を丸呑みにするんだとか。この街でSFなんてふざけてると思っていたが、まさか自分が当事者になるなんて、と友人の話を軽く流していたことに後悔する。

「こ、こういう時ってどうすればいいんだっけ!? ベっこう飴とか、ポマードを投げつければいいのか? ああ、ちゃんと話を聞いとけばー!」

とにかく振り返らないようにしようと思い進み続けるが、どんどん人気は無くなって、彼女の恐怖は相乗して増幅されていく。

もはや気力のみで走り続けていた彼女の耳にバチバチという火花が散る瞬間を連続させたような音が走った。

思わず振り返ると、裂けた口ではなく、紫色の電光が彼女の目に飛び込んできたのだ。

「うおおっ!!」

まったく女性らしさを感じない叫びを発しながらも横側に飛び込んだ黒川が、自分が走っていた場所に目をやると、アスファルトが大きくえぐられている。

間違いない、殺傷能力は十分だ。

「おかしい! こんなにあきらかに致死量でしょ!?! もしかして私が死亡被害者第一号!?!」

混乱して危機管理能力が薄れ始めてきた黒川の冗談のような言葉も気にせず、円盤は第二波を展開する。

(まだ何も始まってないのに、こんなところで死ぬなんて、嫌)

今までに体験したことのない死の恐怖という非日常に実感は湧かないが、本能はそれをしっかりと認識しているらしく、手がビクビク震えている。

雷光は正確に黒川の位置に向けて放たれた。そして彼女を死へと追い立てるだろう。

だが、結果はそうはならなかった。

黒く薄い光の帯を重ねたものが半球状になり黒川を包み込んでいる。その一つ一つの面には綺麗に整列した0の文字がひしめき合っている。

そこに触れた電撃は半球に吸い込まれるように波紋を作り、その内側には一切の変化がない。

「な、何、これ？ バリアー？」

テストで唯一赤点を出す教科は開発、そんな無能力者の黒川には起こせるはずのない奇跡が、彼女の目の前に広がっている。

円盤のほうも、対処に困っているのか、浮遊したまま動かない。

よく分からないが、危機は脱したのではないか、と安心した黒川だったがそれも長くは続かなかった。

今まさに光が弱くなっている。そして、彼女を守っていた境界はすうっと跡形も無く消えてしまう。

(うぬぬっ！ ……なんでまた出ないの？ そもそも今のはどうやって出せたのよ！?)

黒川の抵抗心もむなしく今度は円盤の口がハリウッド映画で出てくる人食い鮫のようにガバアツと大きく開いた。

このままではたしかに危険だ。だが、今の黒川には何かを掴んだような感触がある。助かる可能性の糸口が、希望を見つけた感触が。

「させるかっつーの」

目前に迫る危機とは別の方角から誰かの声が黒川のもとまで届くと同時に何かが彼女の顔の近くの空を切る。

そして黒川がそちらに向き直るよりも速く、一筋に伸びた閃光が円盤の外側に風穴を開けた。

新たな乱入者は軌道が反れた円盤と黒川の間で立ち止まる。結論からいうと、黒川は彼を知っていた。だが場違い過ぎる。タイミングよさがさらにこの違和感を生み出すだ。

スキント コウキ
杉下光輝、彼は黒川のクラスメートだ。赤黒いロツパイヤーのような外見こそ特徴的だが、あまり発言が多いタイプではなく、それも数回しか話した事がないような離れた関係。そんな彼が自分をかばっている。

だが、彼女の疑問はそこだけではない。いつも学校でぼうつとしているような彼には似つかわしい物がその両手に握られている。左手には彼の髪よりも真っ赤なアツシユケースが、右手には銃、というよりはとても小さい大砲型の長筒といった方が的確だろうか。とにかく黒川には処理できないほどの事態が、目の前で高速展開されていく。

「杉下が、何でここにいんの？ ていうか、何で銃なんか持ってるわけ？」

「バイトの帰りに、襲われてるクラスメイトを正当防衛で助けるため、だよ」

「それじゃ持つてる理由になってないって!」

質問をはぐらかしながらも杉下は右手で引き金を引く。筒穴から飛び出すのは弾丸ではなく黒い玉のようなもので、それは空気を裂いて押し進むにつれ、削れていくように弾丸へと姿を変えた。

何度か発泡する杉下だが今度は円盤にはあたらず、後ろのビルに焦げ目とヒビを作るだけ。取って変わるように円盤からは杉下のいる地点に雷撃が撃ち返された。距離があるため杉下は見切って左右前後に素早く回避する。

しばらく互いに銃弾戦を繰り広げ、徐々に差が開いていくと、突然杉下は黒川の方に走り出した。

「ここは素直に撤収だな。黒川、速く走って」

「う、うん!」

さっきまで固まっていた黒川も彼に合わせてその場を走り去る。

円盤の死角になるだろう路地裏の狭い道をとおり、住宅や寮の区画まで逃げ切った二人。だが、この夜の時間帯にはほとんどの人間が家の中だ。

自分達以外に誰も見当たらない黒川には暗闇の中をぽつぽつと照らす街灯が唯一救いに見えてくる。

「はあ、はあ、なんなのアレ……。知ってる杉下?」

「さあ、都市伝説って事ぐらいしか把握してないな」

呼吸の荒い黒川と比べ、杉下は来た方を眺めながら溜息をこぼすだけだ。

「杉下、なんかわかんないけど助けてくれてありがとね。 間一髪
つてやつたわ」

「ええ？ ああ、別に気にすんなよ。 タイミングが良かっただけ
だし、結果逃げてるし」

「それで十分。 ていうかあんなのと闘えないでしょ」

どことなく杉下の頬が少し赤くなり、声は少しずつ小さくなっていく。その反応におもわずクスリと笑う黒川。

「それとさあ、もう一回聞くけどなんで銃なんかもってるの？」

「……護身用」

「嘘に決まってるでしょうが！ 銃刀法違反とかなんとかで普通に
アウトじゃん！ マフィアなの？ 杉下ってそうゆうマフィアなの
!?!」

オーバーなつつこみを入れる黒川だが、実際同級生が拳銃らしきもの
を持っているのは明らかにおかしい。大変おかしい。

「いやいやいや、実はだな、正確にはこれは銃じゃないんだ」

「おかしなデザインを除けば完全に近代の化学兵器じゃない」

彼の持つその筒部分のペイント。たまにシャッターなどにスキルアウトがよく書いているスプレーアートのような仕様で『midia』と描かれており、地の薄ピンク色と合わさって拳銃の重苦しいイメージを払拭している。

それでも先ほどの激しい打ち合い合戦を見れば誰だろうとそれが兵器であることを認知するだろう。

「嘘はついてないさ。弾も入ってないし、普通に引いてもなににも出ないよ」

しれーっとした顔でこたえる杉下にもはや質問の意義無しと判定した黒川は周囲を照らす街灯にもたれ掛かった。

杉下の方かというと、手前の来た道を少し戻って、円盤を警戒しているようだ。

「ここまで来たらもう大丈夫でしょ？」

「いや、もしも力場で追ってきてるってゆーなら、多分逃げれてないな」

「力場って……あれよね。AIM拡散力場。超能力者が無自覚に発してる微弱な力のフィールド、でしょ？」

「ああ、さっきの円盤、能力者を狙って襲ってるらしいからな。もしかしたら、それを頼りにしてるかも……」

「だから、何でそんなに知ってるのよ」

「……………」
「……………」

一瞬無言になった二人の間に頬を打つほどの強い風が吹いた。

「結局杉下、は……………えっ？」

右腕が無い。だが勿論黒川のではない。もしそうなら彼女は悶え苦しんでいるだろう。なら誰か。

杉下の右肘から下が消失している。その断面からは黒くドロドロしたものが流れ出していた。

「い、ひ、う、そで、しょ」

『ギユルギユルギユル』

叫ぼうとするが出ない。足は振るえ、黒川はその場にぺたんと座り込んでしまう。

宙に舞うのは、歯車が擦れ合うような音を立てる違和感を持った青い月とそれに食い干切られた銃を持つ右腕だった。その光景から目が離せなくなってしまった黒川はいくら絞り出しても「あ、ああ」といううめき声しか出てこない。

崩れ落ちる杉下とポトツと落ちてきた右腕は少しも動かない。

都市伝説の『人喰円盤ブルームーン』が、ひどく現実的で短絡な絶望を提示してきたのだ。さきほどのような打ち合いとは質が違う。そして絶望の過程もついに数メートル。浮かぶ青い円盤はニヤニヤ

笑う調子で口を開いた。

暗がりですべて倒れている杉下の腹部辺りからも黒っぽい何かの流れ出ているが、黒川が血と判断するには十分だ。

「冗談でしょ？ 人って、こんな……簡単に死んじゃうの？」

動かなくなった杉下。黒川は人の死を真近に見たことが無い。

テレビの向こう側の話、誰かの親戚の親戚なんて遠い場所にあると思っていたのに。

「こんな、こんなの……」

死がこんな酷いモノだったなんて、彼女は知らなかった。こんな明確な恐怖も知らずに生きてきたのに。

自分の最後の居場所である街灯の光を、辺りの闇がじりじりと蝕んでくるようにさえ見えた。

無数の黒い腕が誘い込むように、その奥にあるどこか見当のつかない場所まで心を引きずろうとする。

黒川はもう動けない。シユンと空を切る風音に続き、割れたガラスが周囲に飛び散る。ついに光は失われた。

しかし、それに続くかと思われた円盤も黒川と同じく動かなくなつた。

幻覚やデジャブではない。二度あったことは三度あるということだろうか。もう一度同じ光景がそこに再現された。

「だからさ、さっきも言っただろ。 させるかって」

違ったのは、銃から飛び出した弾丸が青い円盤のちょうど中心を貫いた事だ。 あるはずのない右手がもう一度引き金を引いている。

『ギギ、ギギギ、ギ、ギキ』

再度円盤からいびつな摩擦音が響くと亀裂が全身に走り、粉碎された氷のように砕け、青い光をまき散らす。

弾丸が貫通した中央から露出する光り輝く三角柱が砕けた瞬間、他の破片はすぐさま空中に霧散した。 微かな明りで、奥に赤黒い髪の毛の姿が確認できる。

「す、杉下あ……?」

黒川の瞳から涙が零れた。 助かった事への安堵だけではない。 それとはまた別の何かも。

薄れる意識と視界のなか、黒川は近づいてくる杉下を真っ直ぐ捉えていた。 彼の顔は、教室で見るぼんやりした表情からは想像できないほど真剣なものだった。

「何回殺されたって関係ない。 オレは守るって約束したんだ」

その言葉を最後に、疲労感やストレスが黒川の全身の感覚を無意識に沈めていった。

黒猫と青い円盤、そして赤兎（後書き）

最後までありがとうございます！

こんな未熟者ですが感想、アドバイス、指摘がありましたら宜しく
お願いします。

日常の狭間（前書き）

二回目、キャラが増えて日常パート？になるのでしょうか。

日常の狭間

何回殺されたって関係ない。オレは守るって約束したんだ。確かにそう聞こえた。

誰を守るの？誰との約束なの？そんな疑問が私の心を支配する。グルグルと頭の中で回り続ける。

そして、千切れた彼の腕。

「杉下ッ！！……………えっと……………いえ？」

私がかぼつと勢いよく起き上がった。だが、視界に広がったのは見慣れた光景。歳の割りにあまり乙女チックではない部屋。

「あれが、夢だったの？」

制服のまま寝てるなんて、よっぽど疲れてたんだろうか。

〈とある狭間の観測黒猫〉

とあるいつもの通学路で、夏の風物詩達にも負けないほどの爽やかで瑞々（ミズミズ）しい黒のポニーテール美少女（胸薄）と、ツンツンした黒髪の、それと違って他に特徴が無い平凡な容姿の少年は、真夏の炎天下にさらされながら自分達の学校に向かっていった。

「ねえ上条、『ブルームーン』って知ってる？」

「悪い黒川ー、俺……………天文学はちょっと」

「うーん、その発想自体は賢いんだけどそうじゃないのよね」

昨日の夢らしきものを思い返していた黒川は、ふいに上条に尋ねる

が、どうやら上条は都市伝説には興味がないようだ。与えた情報が少なすぎたため、月食が何かと勘違いしたのだろうが、月は赤にしか変化しない。

「夜な夜な、青い円盤が口を開けて人を丸呑みにするっていう都市伝説なんだけど、聞いたこと無い？」

「そついやあ、青髪がそんなこと言ってたような……でも、それって最近出てきたやつらしいな」

「そつそつ、何か今流行ってるのかしら、そつゆつの」

「そつだなー他には、使うだけで『能力レベル』が上がる道具とか、ウチの担任が不老実験の完成体だーとか、後はー」

ウチの担任って言うてる時点で都市伝説としてどうなのかしら、心の中でつっこむ黒川。

「死なない男とか」

「死なない男？」

死なないというワードが頭に引つかかる。たしか、今日見た夢の杉下も、あれだけ出血していたにも関わらず、平然としていた。まあ夢なのだから何があってもおかしくはないが。

「アイツから聞いた話だと、その男が高いビルから飛び降りてきて、そのまま地面にぶつかっても、しばらくすると平然と歩き出すんだつてよお」

「それだけ聞くとすごく気味が悪いわね」

おもわずその様子を想像してしまった黒川は苦い顔をする。

「まあ、どれもこれも、嘘っぱい話ばかりなんだが」

二人がそんな会話をしていると、すでにいつものバス停まで到着していたようだ。

「恐らく、夏休みもこれに乗る羽目なるんでしょうねー」

開発の点は努力でも黒川にはどうにもできない気がする。そして後ろにはその手の玄人が。

「ねえ、上条？ 上条聞いてる？」

ツンツン頭の少年が、両手をポケットに入れながら青ざめたまま固まっていた。

それを見た黒川は瞬時に状況を理解する。だが、その考えが否定されることを願い、寸分の確率に賭けてみよう。

「ねえ、ど、どうしたの、上条？」

「……定期がない」

異口同音に「不幸だ」。

とある高校の昼休み、現在の黒川瑞希の残り体力は残りわずかまで減少していた。

原因は、上条がバス停で突然定期が無くなったと騒ぎだし、それにつられていた間に二人揃って無慈悲な無人バスに逃げられてしまったためだ。

もともと料金が馬鹿高いところを通常料金で払わなければ乗れないとなった上条が頭を抱えていたせいで、一緒に学校まで猛ダツシユである。

とどめは一時間目の体育の黄泉川先生による猛暑版持久走というなかなかの地獄っぷり。上条は別のクラスなので本当に運が悪いのは自分なのかもしれない。

そして昼ご飯、

「食べる気力さえ湧かない。これが不幸ってヤツね」

うつつ、と机に額を押し当てる瑞希。そもそも昼食は往きに買う筈だったので手元にはないのだが。

「大丈夫？ 瑞希ちゃんも色々大変だね」

黒川を心配してペットボトルを渡したのが、フカイマオ深井真央。同性の自分でさえ可愛らしいと思うほどの小柄なショートカットの大人しい少女だ。

その彼女のつぶらな瞳やまとう雰囲気は、曇りのない黒真珠のようだと、初対面ながら感じていた。

「上条も上条でだけど、それに巻き込まれる瑞希も瑞希でねー。ホントに不運なのは瑞希じゃないの？」

「最近そんな気がしてきた……」

うな垂れる黒川に憐れみの視線を向けてきたもう一人の少女は不知火セツナ。その外見や振る舞いから気が強そうな印象を受けるが、体力も筋力も並という部分も含め、ファッションなどの流行に気を使っている。この中では一番女性的かもしれない。

ちなみに、彼女のロングの茶髪は地の色なのだが、よく染めてるのが聞かれるらしい。

「上条と瑞希って同じ中学だったんでしょ？　そんなときから仲いいの？」

「まあ、中二の時にごたごたに巻き込まれてから知り合って、って感じかな」

ごたごたというのはもちろん当麻から来たのだが、その時も女性絡みだったのは言うまでもないだろう。

「だから、ある意味こうゆうのは慣れてるんだけどね」

「なんかいつつも展開が夫婦漫才みたいよねー」

「だ、誰が夫婦よー！　アイツはただのと・も・だ・ち・なの！　わざわざ毎回説明してるよね私！？」

こういう類のネタを振ると過激に反応し、術中にはまる事を知っている不知火は、クスクス笑いながら「だってさー」と続けるが、

「瑞希ちゃん、今日はまだお昼買ってないんじゃないの?」

「そうだった! ちょっと食堂の売店行ってくるから待ってー」

「いつてらっしやい」

鞆から質素な財布を取り、すぐ教室を出る黒川に笑顔で手を振る深井。

「真央く、何で邪魔しちゃうのよ!。今からが大事なところだったのにー」

むっとしながらこっちを見てくる不知火に、

「ははは、だって、セツナちゃんはそういつていつもやり過ぎるでしょ」と苦笑する深井。

黒川が廊下を歩いていると、曲がり角の奥から聞いた覚えのある声が聞こえ、おもわず足を止めてしまった。

「何で昨日電話してこなかったんだ」

「そんな余裕なかったんだって。……睨むなよ」

「睨んでない」

一人は兎っぽい杉下、もう一人はの真柴マシバ勇希ユウキ。彼も同じクラスであり、その中では一番背が高く、聞いた話だと百八十以上はあるらしい。そして黒川個人が思うにクラスで一番顔がかっこいい、いわゆるイケメンなる人物だ。

角から少し覗いてみると、ちょうど背の高い真柴が黒川より少し高いぐらいの杉下を見下ろしている風に見える。たしかにあれほどの身長差なら睨まれていると思ってしまうそうだ。

「たしかにー、連絡しなかったのは謝るけどさー、結局オレ一人でも円盤を解体出来た訳だしー」

けっして目を合わせようとしない杉下は困った顔を逸らし、どこか有耶無耶にしまいそうな口調で弁解したが、

「それでも、昨日黒川に見られる羽目になった。俺がいればもう少し効率良く動けたはずだ」

と、怪訝な表情で追求を続ける真柴。

「やっぱり怒ってるだろ」

「怒ってはいない」

彼はまるで一つの答えしか受け付けないといった様子で彼の前にじっと立ち塞がっている。

(私に見られた？ ということは……昨日のは夢じゃない？)

そこで黒川は自分の名前が拳がった事に驚くと同時に、昨日の漠然とした記憶が頭の中で鮮明に浮かび始めていた。やはりあの円盤や杉下との逃走劇は現実のものだったのか。いまいち確証が得れないが夢ではない気がするのには確かだ。

「はあ……悪かったよ。相手が能力を吸い取る都市伝説っていうから、お前の力が通じない、そーゆー展開が心配だったんだ。俺は二人も同時に守れるほど強くないから」

諦めた様に話始めた杉下の言葉は、不安そうに、それでいてどこか無力さを自嘲しているように、黒川にはそう聞こえた。

「ナメるな。お前が思ってるほど、暗部は浅い場所じゃなかった」

「……………」

対照的に真柴は、冷静に、それでいてどこか杉下の考えを戒めるように、無表情の中でもそれは伝わってくる。

その言葉を聞いて、押し黙る杉下。真柴はその様子を見て言葉を続ける。

「もっと頼れよ。それとも、信用してないのか？」

しよげかえってしまった杉下は、「…………悪かった、ホント、いつばいいっぱいだったんだよ」と俯きながら小さく呟いた。そんな赤兎の髪を真柴はワシワシと撫で回す。

「い、今ものすごく子供扱いされてる気がする」

「実際子供っぽい性格してるだろ、お前」

「くっ、自覚はしてるがそこまで言われる筋合いはないね」

黒川には、その意味事態理解できなかつたが、彼らの間には自分には想像もつかないような、何かクラスメイト以外の特別な関係であることは分かった。

「おーい、もういいだろ。　昼食の時間がなくなりますよー」

杉下のその言葉にハツとなる黒川。彼らの会話を聞き入ってしまい、ずっと立ち尽くしていたが、よく考えれば自分の行動は、客観的に見るとかなり不審だ。ここが人通りの少ない場所だったので辺りに誰もいないのは、ある意味救いかもしれない。

二人がそのまま食堂の方に向かったので一安心だが、自分も友達を待たせているのだ。

歩を進めながらも、黒川は考えた。それにしても、あの二人は何者なんだろうか。暗部という言葉も気になる。

（表に立てない集団？　まさか、ねえ。　実際こつやって学校にいる訳だし）

考えても分からない。ならどうするすればいいか。

結局午後の授業もぼうつとして全く話を聞いていなかった黒川はいつの間にかホームルームを終えていた。

「生きてるか瑞希ー」

「ええ？ ああ！ なんとか頑張れたわ！」

目の前で上下に手を振る不知火セツナに面食らった黒川は思わずビクツツとした後、反射的に返答した。

「全然大丈夫じゃないでしょ。 どうすんの？ 真央は今日バイト
なんだけど」

「ええ、うん。 帰るけどー」

まだ完全に覚醒していない黒川の脳は不知火の言葉を処理しきれない
いないようで、ドアの方を呆然と眺めている。
そしてあるものを捕捉した。

杉下だ。

「ごめん！ 用事思い出した！」

しばらくフリーズしていた黒川はいきなり席を飛び出し、教室を出
た杉下を追う。

「えーっと、まだ疲れてるのかあの子。 ……いや、ていうか私は
!?!」

彼女のつつこみに耳を傾けた者はいない。

日常の狭間（後書き）

最後までありがとうございます！

今回登場した真柴君と深井さんのイラストを『みてみん』さんに投稿しています。

上手くはないですが、よかつたらぜひ見に来てください！

マイページです。

<http://4121.mitemin.net/>

また感想、指摘がありましたら宜しく願います。

機密の線引き、それと天川スパイラル（前書き）

遅くなりました、ユーシンです。

今回は一般にギャグと呼ばれるものを目指しました。

ギャグって何だろう？勉強が足りないな……。

機密の線引き、それと天川スパイラル

とある狭間の観測黒猫

七月十八日、放課後、杉下光輝が足を運ぶ先は部活動でもなければ、家でもない。

アルバイトの彼が向かうのは、上司に指定された不規則な仕事場になることが多い。何故不規則なのか、というのは、情報収集という変わった職に携わっているからである。

昨日、都市伝説の青い円盤を追いかけるという、ハードワークをこなす彼だが、今日の仕事は、たまった書類の廃棄という事務的なものだ。

一見共通性がないように思えるが、学園都市では、ハッキングなどによる情報流出を防ぐために、書類をあえてアナログな紙にしておくというのも少なくは無い。

世間を騒がせる円盤の目的や、簡単に捨てることのできない機密情報、かき集め、要点をまとめて、報告する。

必然的に、いらなくなった紙の山を片付けるのも、もちろん自分の仕事のうちだ。

（まあ、ホントは円盤を壊すつもりはなかったんだが……それにまさか『観測黒猫ブラックボックス』が発動するとは……）

追っていた円盤が、自分のクラスメイトの黒川瑞希に襲い掛かったので、おもわず感情的になり、後先考えず破壊してしまったが、普

段はそんなことをするようなタイプではない。
銃だって、機密にかかわる人間なら、誰もが持ち歩くであろう護身用のつもりだ。

（瑞希に見られてたけど、後半は気絶してたし大丈夫だよなー）

ちなみに彼女を家に帰したのは女性の同僚であり、やましいコトは決していない。

途中までお姫様だっこをしていたが、もちろんそれも仕事のうちである。

よって、少々ドキドキしたとしてもしかたがないはず。

少々不安げに道を歩いていると、「杉下！」、と背後から呼びかけられた瞬間、まさかの本人登場にドキッとしてしまう杉下。

「な、何でしょう？」

「何でしょうじゃないわ。昨日の説明、してもらっつわよ」

杉下が振り返ったにもかかわらず、同じクラスの黒川瑞希は行く手を阻むように、彼の前に回りこんだ。

ちっ、憶えてたのか、と内心で愚痴る杉下だが問題ない。肝心の証拠が無いのだから。今朝自分の目で確認したが昨日の痕跡はしっかりと片付けられていた。

もしかすると、夢落ちでなんとか押し切れるかもしれない。

「悪いんだけどさ、これからバイトなんだよ。残念だけどまた次

回、ってゆーのは……」

「そうゆう訳にもいかないわ。昨日の事が気になり過ぎて、こっ

ちはまともに授業が受けれてないの」

その文句に、恨めしい表情を追加し、脇を通ろうとする杉下に圧力をかける黒川。

阻まれた杉下だが正直対処に困るのだ。昨日の事といっても、そのすべてをなぞるように順序良く説明するにしても時間が掛かるし、彼女を納得させるためにはそれをもっと噛み砕く必要があるだろう。ましてや、一般人の彼女には話せないような部分を伏せながらとなると、真剣に明日まで話の構成を練る必要がある。とりあえず最短で終わらせよう。

「具体的にどこが気になるんですか」

「うーん……、あの青い円盤はどうなった、とか？ 昨日言ってたバイトってどんな仕事なの、っていう」

「回答一、塵になりました。 回答二、運送業です、はい以上」

「短い！？ あまりにも極端過ぎて説明しよう、っていう誠意がまったくもって感じないわ！」

「簡略さで誠意を表したつもりなんだが」

「そこよりも、もう少し内容を重視して欲しいんだけど」

「わがままだなー」

そんな流れでいつも通りの有耶無耶スキルを発動した杉下だが、突然「ああ！！」と何かを思い出したように叫ぶ黒川。

正直面倒になってきたので最後だけは真面目に答えるか、と思い始

めた杉下だが、その考えはすぐに取り消された。

「杉下はさ……、どんなに怪我しても死なないの……？」

さっきの質問が捨石だったかのように、無自覚ながらも彼女は最大の疑問をこの瞬間に杉下へ投げかけた。

おもわぬ質問に息を吞んでしまう。思考が再開して初めて浮かび上がってきたのは後悔。

動かなくなっていた彼女を見て、気を失っていると思いこんでいたが、それが軽率な判断だった。

だが、今はそれよりも、質問に答えるべきかどうか。彼女も同じように固まったまま杉下の答えを待っている。

「……普通じゃ死なない。心臓に穴が空いても、脳を撃たれても再生する、そーゆー能力なんだ。まあ『無能力者レベル0』なんだけど」

「『無能力者』？ そんなにスゴイ能力なの？」

「少なくとも、『身体検査システムスキャン』にはそう出てるな」

『身体検査』とは、この学園都市で行われている超能力開発の六段階の結果を計測する検査のことである。

『無能力者』とはその中でもっとも低い値であり、実質的に力が無いに等しい。

ときおり杉下のような例外も現れるが、所詮は機械が計測するのだから、計測不能イレギュラーが出てしまえば結果は無能力者ゼロになるというわけだ。

「……そっか。だから腕が治ってたんだ」

そう呟きながら黒川が何か考え込んでいる。

「それでもまだ色々と怪しいわ！ ていうかますます眠れない！」

「いやいやいや、ここまで事情聴取に応じたんだ。そろそろ釈放してくれてもさー」

「そうね……じゃあ、私が杉下のバイトに付いていくことにする。そっちの方が手間が省けるし」

肝心の、何で家にいたの、という部分に触れられなかったのは幸運かもしれないが、これはこれで面倒かもしれない。

まさか本当に来るなんて、と思いつつ追い払おうとしない杉下。最初は渋っていたものの、黒川が頑固なことを知っているため、結局こちらが折れるしかない。

先ほどから、無理やり背後を取られたまま、質問は続いている。

「で、具体的に何するの？」

「うーん、別に、さっきも言ったとおり、荷物を運ぶだけだな」

あえて廃棄の話をしないのは、情報の件に首を突っ込まれるとやっかいなので、あえて運送と表現しているのだが、嘘ではない。苦しいが、情報を運ぶのが彼の仕事だ。

「（銃が必要な運送業……）……ま、まさか大量の白い粉を！？
昨日のアタツシユケースはそういうことだったのね……」

「いやいやいや、たしかに疑われる要素は満載なんだけど、実際た
だの運送業なんだよ。だからそんなに距離を取らないで欲しいな」

立ち止まってから、少し後方に下がりながら疑惑の視線を送る黒川。
杉下が近づく分、後退る光景は周囲の通行人が何か勘違いをしてし
まいそうだが、本人達は気づいていない。

もう疲れてきたのでとぼとぼ歩き出す杉下。さらにその背中を疑惑
の目を向けたまま追う黒川。

「駐車場？」

杉下が突然方角を変え屋外駐車場に入っていく。

「ここで車に乗って、地下街まで荷物運びの予定なんだけど、」

杉下が真っ白なワゴン車の中を覗くが誰もいないが、後ろの荷物室
には大量のダンボールがすでに積み込まれていた。

ちなみに、助手席には昨日の真っ赤なアタツシユケースが置いてあ
る。

「運転手がいないの？」

「いやー、そうじゃないんだが……」

うーん、と唸りながら顎に手を当てている。

「おーそいわあー！！」「右に同じいいー！！」

「ぐふああ！？」

背後からのとび蹴り（ダブル）奇襲により顔面を車のガラスに叩きつけられた杉下。ガツンツ！！という鈍い音が痛々しさを物語っている。

ガラスは防弾なので問題ないが、杉下の顔は車体を摩擦しながらずれ落ち、そのまま地面に倒れ伏せた。

啞然とする黒川も気にせず、襲撃者である肩までツインテールの少女達は、まだ不服そうな表情でその場に佇たたずんでいる。

クリツとした大きい目が特徴的な、小学生ぐらい可愛らしい彼女達は近づいて見ても分からないほどに良く似ており、見分けるのは至難の技だ。

「そつ、んなに待たした覚えはないんだが、そんなに激昂してるのはどうしてでしょうか？」

足をガクガクさせながら立ち上がった杉下は、眉間にしわを寄せながら静かに訴えかける。

「何でかって？ 待ってたからだよ。 私たちはこの日を待ち続けた！」「だが、もう我慢の限界だあ！」

「……？ 今日とは廃棄だけで、特に素敵なイベントは起こらない予定なんだが」

「イベントだよ！ 復活祭という素敵なイベントだよ！」「今の私

たちは、冒険の書が消えてからやっと天空の花嫁
選びにたどり着いた、そんな気持ちでいっぱいなの。分かるか少
年ッ！」

「セーブデータが消えたことによりオレが殴られたと、……なんて
理不尽な」

「元は光輝がはっきりしないからだよ！」「勧誘というルートをな
んか選ぶから、グダグダな展開を繰り返すことになったんだ！」

「はっきりしないだと？ オレは今までファイブでは金髪の花嫁し
か選んだことがないはずなんだ。それにお前達の部屋のファミコ
ンに触れた憶えは皆無だ！」

「ファミコンじゃない。それは、もっと大きなものよ……」「ち
なみにこれ以上はさすがにメタ発言だぜ！」

(結局何が言いたんだよ、この双子……)

とにかく一方的に杉下(高校生)が双子(小学生)に罵倒されてい
る。

成り立っている気がしない会話で、置き去りにされている黒川は、
とりあえず杉下に小声で話しかける。

「ねえ、この二人は？」

「仕事の同僚、になるな」

「ええ！？ だって小学生よ！？ ちょっと反抗期な双子の小学生
よ!?!?」

「バイオレンスな小学生です」「こんにちは」

「こ、こんにちは、」

黒川が混乱しているにもかかわらず、当の本人達は明るい笑顔で彼女の前に近づいてきていた。

「私が姉の天川明アマノガワカキでー」「私が妹の照テルでーす」

「私は、杉下と同じクラスの黒川瑞希。よろしくね」

杉下との態度の変容ぶりに驚く黒川だが、おそらくアレは彼にだけなのだろうと無理やり納得しておく。

簡単な自己紹介が終わると、妹の照がポケットから鍵を出し、はいっと杉下に手渡す。

「じゃあ、いくか」

とはいっても、さきほどから見渡したところで、ここには杉下と黒川、そしてこの自由姉妹しかいない。

そんなことも気にせず、杉下達は車に乗り込み始めている。

「ねえ、運転手はどこにいるの？ 周り誰もいないけど、」

「ああ。オレだよ」

しれっとしている杉下からは悪意を感じない。

「ホントに運転するなんて……」

地下街付近にある駐車場で、車から降りた黒川は眉をしかめていた。

「これでも結構慣れてるんだけど、下手だった？」

「そうじゃないけど……、銃刀法に免許偽造ってどうなの？」

「必要なら、ルールも破らないと、やってけないのさ」

「どっかの役所のお偉いさんみたいねえ」

杉下が後ろのトランクを開けると、双子がそちらにとことこ歩いていく。

「じゃあ、始めますか」

「ガッテンです兄さん!」「やっちゃんえマイシスター!」

杉下が一つのダンボールを持ち上げると、双子の姉の明が虚空を掴むように手を伸ばした。

すると、杉下と姉のちょうど間に真っ黒な円が、元の空間を押し広げるよう出現する。

大きさはダンボール箱より少し大きく、横から見るとコピー用紙と同じほどの厚さだろうか。

「な、何なの、これ？」

「ふっふっふ、これこそが私の能力、『亜空転送ブラックホール』
ッ！」

いきなりな出来事に驚きながらも、奥行きのない穴を覗くように見
入る黒川に対し、待ってましたと言わんばかりに双子が説明を始め
る。

「例えば、このダンボールを、この中に、放り込んでー、」「ずれ
た座標に一時的に送り込む」

明が「お、おもしろい、」と言いながら運んできたダンボールを円に当
てると、沼にゆっくり沈んでいくように、箱がその場から消失する。
続いて杉下が、平然とした様子でダンボールを黒い穴の中に放り込
み始めた。

「それって『瞬間移動レポート』じゃないの？」

「それが違うんだよねー。もし、普通のテレポーターなら、転移
距離、時間、重量の設定が必要になる訳だ」

だが、と照は呟いて、

「私たちの『亜空転送ワームホール』に、その常識は通用しねえ」

まるでヤクザ予備校生＋新人ホストのような口調で強く言い切る二
人。

「『亜空転送ワームホール』？」

「そう、私たちは二人でこそ真価を発揮するのさ」「明が送った物は、いつでも私の『亜空転送ホワイトホール』で、好きな量を、時間、場所とわず取り出せるの」

「へえ、セツトの能力なんて、そんなもあるんだ……」

関心する黒川に満足したのか、双子は「よっしゃー」と勢いづけて荷物を運び出す。

それを見て、小学生に運ばせるのが忍びなくなった黒川も「私も手伝うわ」と三人に加わっていく。

トランクの中身が半分以下まで減少したのを見て、姉の明は空いた場所に腰掛けた。

そんな彼女の目線は、黒川の方に向いている。

(やっぱり、知らない人とは気まずいのかしら？ 人当たりは良さ

そうな感じだけど……)

それに気づいた黒川は「どうかした？」、と尋ねてみると、

「やはり、ずっきーは我々の仲間のようだ」「たしかに、彼女からはもはやそういった才覚を感じるよ」

ふっふっふ、と笑う明に乘じ、妹も手を止め、ひよこつと顔だす。なんだかよく分からないが、『ずっきー』というあだ名を付けられているようなので、さっきの心配は取り越し苦労らしい。

「自分で言うのもなんだけど、才覚なんて言葉、今まで聞いたことないわ」

ふふつと笑いながら、黒川はよく分からないまま謙遜するが、姉妹達の視線は黒川の顔よりも少し下あたりを見つめていることには気づいていない。

「いやいや、さすがですよ」「間違いなく、ずっきーは、私たち『まな板連盟』の仲間だね！」

グツと親指を立てる二人。「へっ？」と口から漏れる黒川は彼女達の言動を理解できていない。

「高校生でその値は見事だね」「なかなか、そんな胸囲はお目にかかれないよー」

「な、な、なな、なああああ!？」

胸囲、で双子の意図を理解した黒川は顔を赤くして口をぱくぱくとしたまま固まってしまふ。

まさか今日初めて会った人物にこんなコトを言われる日が来るなんて、誰が想像できただろうか。

「どうやら双子は胸が成長しないなんて噂があるらしい……」「でも大丈夫！ ヒンヌーはステータスだ！ って偉い人が言ってるんだよ！」

怪しい宗教のようなキャッチフレーズを、ころころ表情を変えながら熱弁する双子。

たいして黒川は、うつむきながら、わなわな全身を震わせていた。

「そんなことないわ!! 私毎日牛乳も飲んでるし、ちゃんと体

操もしてるもの！ だから、きつとこれからだもん！」

バツと顔を上げると、開口一番に自身の全力を持って完全否定する黒川。

おもわず双子も「おおお！？」としり込みする。

激しく呼吸する黒川はあることに気づいた。一つは自分が今まで誰にも言った事の無い秘密を大声で暴露してしまったこと。

もう一つは、今、クラスメイトの一人、黙々と仕事をしていたはずの杉下が驚きのあまり目を大きく見開いたまま、固まっていることだ。

二人の目が合った瞬間、両方の顔がリンゴのように真っ赤に染まる。

「ああ、違うの、違うのよ……。い、今、聞かなかったことに……」

油の切れた工作機械のように、がたがた震える黒川。

「ホント、すいません……」と目を泳がせながら謝る杉下。

頭に？を浮かべる双子は、杉下が代わりに頭を下げているとは認識していなかった。

地下街までの道のり、二人が気まずい空気をぎこちない会話で過ごしたのは、この後の話。

機密の線引き、それと天川スパイラル（後書き）

最後までありがとうございます！

どうでしょう？最初に質問って………すみません。

初めてこんな暴走してみたんですが、アウトかセーフ、悪ふざけじゃないか自分で判定できないのが難儀です。

感想、アドバイス、天川自重しろ、ハレンチ千万！またはその逆の方、感想板にて宜しく願います。

不平等な『可能』を、平等な『不可能』に（前書き）

すぐく待っていただきました、ユーシンです。

今回から自分設定全開です。

前からか……。

不平等な『可能』を、平等な『不可能』に

とある狭間の観測黒猫

放課後に賑わう地下街。そのなかでも、特に人通りの少ない道を歩
き続ける。

そうすると、だんだん人の声や店舗の明りが小さくなっていく。周
りにはシャッターが増え、明りは天井の蛍光灯だけ。

今黒川達がいる場所は、そんな場所にある物置となつた廃店舗の一
つだ。

「しゅーりょー」「大小合わせて計二十一個、搬送完了です」

「ちいさくても、きつと、きつといまから。　そういまからだもん。」

「……よし、後は並べるだけだなー。　ガンバールゾー。　…

…はあ」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ双子怪獣ツインテール、天川姉妹。強制的に『ま
な板連盟』に加盟、又は殿堂入りし絶望する絶壁ポニー黒ニーソ美
少女、黒川瑞希。そんな光景を見てなんだか疲れている赤ウサギへ
アーの杉下光輝。

「ずつきー。　大きいだけが正義じゃないんだよ」「女の子には様々な武器があるじゃあないか。　ねっ、光輝？」

「何故オレに振る。　そーゆー事は、君達個人で解決してくれ。オレには縁遠い話だよ」

どこか遠い目をしながらせつせと箱を並べていく杉下。　ちなみに黒川は壁にもたれ掛かって絶望している。

「ま、まさか！？　光輝はキョヌー派なのか！？」「てめえ！　今まで何回バニーさんに『かつこよさ』を上げてもらった！？」

「おいおい何の濡れ衣だ。　オレはそういったイベントは業務的に完遂してるんだよ！　より効率の良い主人公キャラに回して何が悪い！」「

ベテラン刑事の取調べのように迫る双子が「カタルシスカー？」と追及するのに対し、杉下は前科がありそうな犯人ばりに応戦する。

「ならどうなのー？」「光輝は小さい方がいいの？　大きい方がいいの？」

「大きさの問題じゃない。　大事なのはそこじゃないッ！」

「杉下……まさかそんなヤツだったなんて……」

はっ、と顔を上げて杉下を睨む黒川。

「いやいやいや、なんでそんな目で見るとだよ？　いやだなー、春を思う男子学生達の脳は、何割かそーいった要素で構成されてるん

ですよ」

(開き直りやがった!?)

「ほうほう」「光輝はヒンヌーでも構わんとな?」

「ああもう! 仕事するからいいだろー。後はオレがやつとくから、キミらはさっさと次にいきなさい」

「ちつ、今日はこのぐらいにしといてやるか」「でも忘れるな。

キミには巨乳の義理の妹と同じ部屋で寝泊りという容疑があるんだからな」

そういつて廃店舗の出口に歩き出す双子。「じゃあねえーずつきー」と手を振る二人に、真っ白に燃え尽きた黒川は乾いた笑顔で手を振り返した。

黒川のそんな様子に心苦しくなった杉下は「オレはそんなに気にする事じゃないと思う」と少しフオー。

「杉下って、デリカシーが無さ過ぎる」

ゆらつと立ち上がった黒川は杉下の手前に行き頭部を平手で叩き、顔に影を作りながら睨む。

「それはよく言われるんだけど、そこまでアクティブに説教されるとさすがに心が痛いです」

そういつつも着々と仕事を進める杉下。彼は割と不器用なので、役割分担上こういった単純作業は進んで引き受けるタイプだ。

親組織からの仕事をこなしつつ、こつこつと取引先からの依頼こな

す彼は中小企業や建設業者から強い信頼を獲得している。安心と安全、そして信頼。それが彼の所属組織『スタイル』の売り文句。

別にお金が必要とかそういう理由ではなく、杉下からすれば趣味に近いのかもしれない。

そんな時、

「すみませーん。誰かいますか？」

静まり返っていた空間に、黒川にも杉下にも聞き覚えの無い声が響いた。その音質は、無意識に自身が理想とするような、それが美しいものの正解であるという明るいものだ。

おもわず黙って聞き入ってしまうような声、二人が決して無視できないようなはつきりとした力強ささえ持ち合わせている。

その持ち主は声だけでなく、姿も美しい。ウエーブのかかった長い金髪に、西洋的な雰囲気を持ちながらも、親しみの持てる日本人らしさを維持する、ハーフやクォーターのような絶妙な顔立ちの、見慣れない制服を着た少女。

黒川の媚びず凜とした、瑞々しく透き通る、自然から生まれ風景として感じ取れるような調和性の美しさとは対称的で、加工された宝石のような輝き、嚴重に守られてきたような潔白感、具体的な価値が付いて回る芸術性の美しさを持っている。

友達や知り合いを評価する時の可愛いや、綺麗のような曖昧なものとは質が違う、格式高く品のある、評価の対象になる美だ。けっして黒川が劣っている訳ではなく、競う場所、ジャンルが違う。

「は、はい？」

見入っていた杉下はどもってしまふ。可愛い知り合いは割と見慣れ

ているつもりだったのだが、その像が彼女と一致しない。大人っぽい子供っぽい。それぐらいのアバウトな杉下のカテゴリーにも収まらない。

新しいものに出会った時の衝撃が彼の思考を鈍らせる。

「この辺で、真っ白な髪にどこにでもありそうな服を着てる、高校生ぐらいの態度が悪そーなヤツ、見ませんでした？」

「さあ、外は誰も通ってなかったと思うけど」

「うーん……、どこいったんだろーな……この辺をうろついているはずなだけどなー」

わざとなのか天然なのか、いかにも困ってますという動作で何度もその場を見回す少女。

そんな姿に思わず声をかけそうになった杉下だが、黒川の方が速かった。

「あー、その辺だったら私も探すの手伝おうか？」

「ええッ!?! ホントに探してくれるの!?!」

「どーせ暇なんだし。暗くて女の子一人じゃ心配だしね」

「ありがとー! 私、アシユリー・ヘンブリー。ええっと、十五歳よー!」

「私は黒川瑞希。 高校一年」

「ちなみに杉下です」

日本語が達者な外国人観光客のような少女は先の天川姉妹にも負けない元気で、黒川の第一印象だったお嬢様のイメージとはかなりズレがある。

後ろで赤いのが何か言っているが二人はそこに触れない。

「じゃあちよつと行ってくるね」

「はいはい。こっちはもうちよつと用事があるから、見つかったら戻ってくるように」

「はい」

割と簡単な確認作業を終え、黒川は店の外に出る。するとアシユリーが小声で、

「ねーねー。あの人ってミズキの彼氏なの？」

「違います」

最近初対面でも失礼な人が多い気がするのと心の中で憤慨する黒川。ちなみにそれが杉下に失礼とかは思っていない。

静かな空間に賑やかな声を響かせながら、少女二人は淡々と歩き続ける

「いやー、一人で探してて何か寂しかったたんだよねー」

「それはいいんだけど、探してる人と何ではぐれたの？」

「そうそうそれなんだけどさー！ 最初は一緒に買い物に行く予定だったのよ！ そしたら急に誰かを見つけたらしくって、お前はそこで待つてるーって。マジで信じられないでしょ！？ 私はジツとしてるのが一番嫌いなのに！」

「は、はは。 なんだかそんな感じはするわね」

しゃべるはしゃべる。このまま相づちを打ってるだけで話が途切れることなく探し人が見つかるのではないかと黒川は少し呆れてしまった。

「たしかに入れ違いになる可能性は捨てがたいわ。でもまあジツとできないのよ！ もやもやしてるのって一番、性しょうじに合わないと思うわけ」

「それでここまで来てみたと」

「そういうことね」

なんて忙しい方なのだろうか。元気ハツラツにも程がある。おそらく黒川が今まで会った人物の中で一番騒がしい人物で間違いない。やはり見た目とはギャップがあるなーと思いつつ、彼女の姿をもう一度見直す。

（な！ 私より年下なのにこのサイズ！？ 揺れている？ 微かだが揺れているのか！？）

改めて横から見ると、彼女を制服を隆起させている二つの物体、いや、一対の山のようなモノが歩きたびに誇らしく自己主張している。先ほど謎姉妹に好き放題に言われていた黒川は今だ立ち直れていない。

「どうしたの？」

「へ！？ いや何でもないよ！ ……アシュリーって高校生なの？」

理性が緩み、残念なプライドが顔を出す。まさか中学生ではないだろう。そう言っただけ欲しい。いやそうあるべきだとさえ思う黒川。

「あー、……」

帰ってきたのは、満足な答えでも残酷な真実でもなく、曖昧な苦い笑顔。

「私、学校通ってないのよねー」

「え？」

ばつが悪そうに答えるアシュ。まさか、スキルアウトには見えないが、何か立ち入った事情があるのか、黒川は気まずくなって黙ってしまう。

「まあまあそこは気にせず！ ていつかどんどん暗くなってるよね？ こっちにはいいのかしら？」

アシユはそんな流れを持ち前の明るさでひっくり返す。黒川には彼女の顔がどこか寂しそうに見えた。彼女の言葉どうり、辺りに人の気配も無ければ明りも少ない。夏のはずが、地下のせいかどこか薄ら寒い。

「あ、向こうに誰がいる」

黒川が指した先には少年が佇んでおり、こちらに気づくとゆっくりと歩き出した。

だがその少年はさきほど言っていた白髪という条件に当てはまっていない。

色は黒、髪型はストレートのアシンメトリーで左目が隠れている。その特徴から、学校の校則に引っかからないぎりぎりを追求したような印象を受ける。

「はーあ。 やっと見つけたんだが」

「知り合い？」

「……………」

黒川がアシユに尋ねると、彼女は黙って首を横に振った。

「あー、そっちの黄色じゃなくてお前だよ」

「私？」

少年が探していたのはどうやらアシユリーではなく黒川らしい。

「あんまり手間を掛けさせないで欲しいな。 『観測猫シユレディ

ンガー』」

少年は不気味な笑顔を浮かべ、謎の単語を口にする。その瞬間黒川の隣にいたアシユは険しい顔付きに変わる。

「騒ぎになると面倒だし、さっさと終わらせたいんだが」

ギューンツというかん高い音を合図に少年の背中の後ろから青い物が一気に膨れ上がる。それはまるでCGグラフィックのような色や光沢でどこか現実味のない浮いた印象を与える。

黒川瑞希はそれをよく知っている。

「な、なんでそれが……？」

少年の背中に浮かぶ青い円盤はどこか神々しさを放ちながら歯車のように回り、浮かんでいる。

そこからは予想が付く。前回と同じなら、そう黒川が思うと同時にあの雷撃が二人を襲う。

「きゃあああッ！」

バチバチとエネルギーの弾ける音が鼓膜に広がり、しゃがみ込んでしまう黒川。

しかし痛みは無く、目を開けると黄色い透明な壁が面となって二人の少女までの道を遮っていた。

その一面にはびっしりとO U Tの文字が浮かび上がり、電光掲示板のように流れてはまた現れる。そこに触れた電撃は水面に投げられた石のように波紋を作り消えていく。

「アンタ、何がしたいわけ？」

「何が？ そーだなあ、より強い力場を組みたいってところだ。前はそっちのお友達に壊わされて、一から組み直して散々だったんだが」

「つまり、拡散力場を集めて、複数の能力を併用するってこと？ 何それ『多重能力デュアルスキル』？」

小馬鹿にするように笑うアシュだが常に流れる電撃を打ち消しているせいか、額には汗が浮かぶ。

「別に理論なんかどうでもいい。俺が出来るんだからそれでいいだろう」

「それでも馬鹿よ。能力を打ち消すための能力を手に入れて併用するなんて、矛盾するじゃない」

「そうか。お前も多分『観測猫』だな？ だったら教えてやる。俺の能力は『矛盾影猫ニアアビリティー』。お前らの亜種であり、理論矛盾の解析装置だ」

「解析装置？ 超能力の確率部分に干渉する『観測猫』が矛盾してる？」

「正確には超能力だけでは成立しえない空白の方程式という意味なんだが。つまり、お前達が無意識の部分で操作しているものを使えばこんなことが出来る訳だ」

そんな会話を挟みながらも電撃は止まらない。おそらくアシュリー

の消耗をまっけているのだろう。線の攻撃に対する面の防御はあまりにも効率が悪い。

「ねえ！？ 『観測猫』って何！？」

「えええッ！？ ミズキっ、自覚してないの！？」

「私には会話の意味がさっぱりなんだけどッ！？」

「つつう…… 『観測猫』っていうのは！ 『自分だけの現実』が世界に干渉する過程を改ざんする能力！ 因みに私こうやってッ！！」

アシュリーは途切れさせながらも説明を続け、彼女が右手を振るうと、それに合わせて黄色い透明のリボンが直線上に地面をえぐる。少年の方は距離から見ても、冷静に判断でき、余裕をもって左右に避けた。

「能力だけじゃなく物質さえ弾き出す能力か。 どうやらお前も亜種らしい。 でもまあ自分から始点を外せないなら所詮そこまですんだが」

「『観測黄猫ログアウト』。 一発でも触れたら別次元に即退場よ！！」

激しい攻撃の中、黒川は昨日の襲撃を思い出した。昨日自分を覆った薄黒い盾はおそらく彼女の言うそれなのだろう。

自分にも能力があったことに驚きつつも、使用法が分からないのが疑問でしかない。彼らのように応用して振り回すことも出来なければ、昨日使用した実感さえない。

先ほどの会話からの推測だがアシュリーの能力は正確には打ち消す

というものではないように見える。

だからこそ彼女の能力には気に留めず、自分に狙いを定めているのかもしれない。

もし自分が力を使えるなら状況を打開出来るかも。

「まったく！ 昨日の赤いやつより面倒だな！ お前も不死身だったなら遠慮したりしないんだが！」

「は？」

「流石に殺すのは気が引けるからな！ 俺だってそこまで腐ってない。だがまあ目的のためならある程度は妥協する。抵抗するなら動けないぐらいになってもらわないとな！」

「……ふざけてる。人を傷つけて気が引けるって？ 私はアンタみたいな薄っぺらい考えのやつが、イッチバン！！ 大っ嫌いなんだよ……！」

「力のある奴は何をやったって許されるだろう！？ 所詮世の中そんなもんなんだよ！」

暴力的で自己中心的な思考が力によって正当化されることが、アシユリーには許せなかった。

だが、少年自身もそれが素晴らしい正論とは思っていない。それでも仕方が無い。周りはいつだってそうだった。

自分から大切な者を奪ったのも一方的な暴力だった。

なら力を持って対抗するしか方法が無い。それが足りないなら他者から奪うことも躊躇ためらわない。

命を奪わない事は少年の過去への反抗でもある。それが唯一彼らと自分を分ける境目だと信じているから。

「なら、どうして！ 杉下にあそこまでっ、死なないからって、あんな……ッ！」

悲痛な叫び上げたのはうずくまっていた黒川だった。死なないから、それだけであんな悲惨なことが出来るのか。

腕が飛んだ瞬間の彼の顔はたしかに痛みを訴えていた。叫び声は上げなかったのか、上げなかったのか。

薄れる意識の中、それでも自分を守ってくれた彼を見ていた。

あれは死なないからかさけなかつた、隙を突くためだった。そんな打算や策略には見えなかつた。

身を切つてまで自分を守つた彼が、仕方がないであんな目にあつたのか。

「なんでつて、こつちがそこまで考慮してるのに、それでも立ち向かつてくるんだから」

少し間を置いて、もう一度繰り返した。

「不死身なら尚更、仕方無いだろ」

あまりにも理不尽だった。一方的な不条理だった。

ついに黒川は相手から善意を探しだす事を諦めた。

彼女の人間としての共感の猶予が、今まで揺さぶられた事しかない心の線が容易く切れた。

「ふっ、ざけんなああああああッ！！」

激昂が境界線突き破る。自身を無意識で守っていた視えない壁が

砕けた。

設定されていた自身の周囲を守るそれが、目の前の不平等な可能性を叩き潰すために方向性を手に入れた。

黒川の咆哮と共に、何かを絡めとるように右手の指を動かすと、それに連動して、迫る雷撃が、いや、空間そのものが捻じれ始めた。彼女の瞳に映る、能力発動空間に浮かぶ世界改変を実行する膨大な数列が、黒川の右手の前ですべて0に変わっていく。

『自分だけの現実』によって歪められた世界が、『観測黒猫ブラックボックス』によって一方的に正しい位置に訂正されていく。ギチギチと異様な音を立てながら、異能は手の一点に吸い込まれていく。

異様な流れの余波で青い円盤が簡単に砕け散った。

辺りが静まったと同時に、息を荒げる黒川はその場で膝を折った。

「は、ははは、いや、ちょっとビビった。でも結局、能力を打ち消せただけなんだが」

固まっていた少年が改めて状況を判定するも、自分の有利は変わっていない。

あれだけ膨大な力を消費する『観測黒猫』と、守りにしか特化していない『観測黄猫』。別に状況が変わった訳ではないのだから問題ない。

力場はまだ残っている。新しく組み上げる余裕はまだ残していたはずだ。

初めと同じ手順でデジャブのように現れる円盤。少し小さいがそれでも十分だ。

「でもまあ残念だったな。一回単発。そんな消耗じゃ、『警備員』を呼ぶ足止めにもならないんだが」

ふつと鼻で笑い、見えない地上を見上げる少年。たとえこの騒動を一般人に通報されていたところで、到着にはまだまだ時間が掛かるはずだ。

だが、見上げたそこで一つ疑問が浮かんだ。

天井って、あんな近くにあったのか。

疑問が解決したのは、その天井がどんどん近く、大きくなってきた時だ。円形に切り取られた天井が砕け、鉄骨、コンクリート、照明達が凶器に変わって飛来してくる。

(まさか！ 始点はどこでもいいのか!?)

黒川の一撃で安心していただけだと思込んでいた少年は、金髪の少女、アシユリーを見る。そして彼女も少年の方を見て、得意げにこう言った。

「私なんの策も無く留まってると思ったの？ とっておきの一番は、こつという時に使うのよ」

「ッ!!」

少年が顔を悲痛に歪めてすぐ、降り注ぐ大量の建築材で、アシユリー達にその顔は見えなくなった。

ただ天井に穴を開けただけでは、あそこまでの量は降ってこない。なぜ通行不可能な状態の量が目の前を埋め尽くしているのかは簡単

なことだ。

さきほどの鬪いの中で、彼の頭上はかなり高い部分を、能力で少しずつじっくりと切り崩していたのだ。

手をパンパンと叩いたアシュリーは疲れきって呆然としていた黒川の方へ近づき、彼女の手を取る。

「ほら、早く行きましょ」

「え、でもあの人は？」

「大丈夫よ。あんなのさっきの攻撃で防いでるか後ろにと避けてるっつーの。私が距離とタイミングを、最大限のここ一番で合わせてやったのよ。それでも助からないなんてもう知らん」

ふん、と腕を組みながら可愛らしくむくれるアシュ。彼女には彼女なりの考えがあるのだろう。

「とりあず、探すのは中止。さっきの赤いの連れて上に上がるわよ。立てる？」

「うん、もう大丈夫だから」

二人はそのままもと来た道へ駆けていく。

不平等な『可能』を、平等な『不可能』に（後書き）

最後までありがとうございます！

訳がわからないよ、と思った方、すみません。

こんな感じで進めていきますが補足はしていきたいです。

実は今回熱を入れ過ぎて、二つに割れてしまったんです。

また目標^{ゴール}が遠くに！

謎の集団を待つてくださっている方すみません。

そしてテスト期間です。

皆さんすみません。

また現れた時、ちょっと気にしていただけると幸いです。

武装した感情論（前書き）

憶えてますか？ユーシンと申すものです。

テスト明け更新、消えたと思われていたでしょうが、この作品が一番好きなのは自分なので諦めたりはしないですよ！って自分で言うてしまいました。

おそらく何だこれってなると思います。

武装した感情論

とある狭間の観測黒猫

廃店舗にて、綺麗に並べられたダンボールは翌日焼却場に運ばれていくだろう。

どうせ捨てられるなら並べる必要はないだろうが、回収する業者も人間なのだから楽な方が良いに決まっている。

そいった杉下の気遣いはもはや無意識のレベルに達しているのだった。

「こんなもんかね。　　そんでどうしよう。　　瑞希達と一緒に探すべきか……」

大事な赤いスーツケースを手に取る。点検、シャッター、鍵、確認作業は手早く済まし、彼女達が歩いた方を向かう。

(うーん、さっきから何か嫌な予感がするような……)

無音とこの薄暗さには慣れ親しんでいるはずなのに、どこかいつもと違う、杉下がよく知っている場所のはずが、何かが違う気がする。

(科学の街で第六感ってゆーのは、六年経ってもまだまだ親しめてないってことでしょうかねー)

そんな彼の不安に触発されたように、ガラガラガラッ！という、何かが崩れるような、ガラスが割れたような音が通路の奥から響き渡ってきた。

嫌な予感というヤツが、第六感というモノが、それが危機の音だと告げている。

（おいおいおいっ、もしかして瑞希の方かっ？）

直ぐにでも彼女の安否を確かめるために、ケースから、鮮やかな拳銃を取り出し、全力で走り出す杉下。

きっと事故ではない。狙いは黒川のはずだ。彼女の持つ『観測黒猫』が狙われている。

（でもどこにだ！？ 治安維持型の暗部が手を出すのはありえないし、過激派は昔の一件以来手を出してきたためしがない。裏切りなんてありえないし、そもそも瑞希の能力を知ってる人間なんて……ッ！）

そこで思い出す。金髪の髪の少女のことを。どこの小間使いかはいらないが彼女が仲間を連れて黒川を狙っていたとしたら。

少女の明るい雰囲気のせいかな、完全に気を抜いていたが、よく考えればあそこに現れたことからおかしいのだ。

自分から距離を置き、そのまま。

後悔だけが彼の心の中を駆けずり回る。自分の浅はかさが、甘さが、弱さが、また彼女を苦しめることになる。

相手の動機なんて何でもいい。今は彼女をどう助けるかが重要だ。

角を左に曲がったところで、杉下は突然足を止める。

この状況で何故か。杉下の目の前には無造作な白髪の少年が立って

いた。どこにでもありそうな量産物のシャツにジーンズ。そこまでは問題ない。

ただ、その少年の右手に拳銃が握られているのなら、彼にとってそれは十分大きな障害に成りうる。

互いに目が合った瞬間、銃口も同じようにそれぞれ向け合うのは自然な流れだろう。

「悪いけどさっさとどいてくれ。　オレは今人生で一番急いでるんだ」

「あ？　それはこっちも同じだったの。　さっきから探し回って疲れてんだ。　さっさと連れて帰って終わりにしてーんだよ」

睨み合いの中、先に引き金を引いたのは白髪の少年の方だ。

狙うというよりは、威嚇なのか、弾は杉下に当たることなく闇に消えていく。

それを合図するかのようにある程度互いに距離をとりながらも、打ち合いは続く。

「退かねえってつもりなら、死んでも文句言わねーよな？」

「そつちこそ、しばらく仕事が出来なくなるぞ？」

売り言葉に買い言葉。言い切った杉下には勝算があった。

一つは不死身。自身の能力によってどんな損傷からも即再生できる彼からすれば、いくら弾丸を浴びたところで問題ない。

撃ち続けられれば話は別だが、弾は有限であり、いつかは手が止まるだろう。

もう一つは銃の性能だ。杉下の持つ銃は普通のものとは違い、弾丸や反動が存在しない。代わりに自分の再生エネルギーをそちらにまわし、擬似的に弾を構築しているのだ。

勿論科学的な理論では、そんなことは成しえない。彼の能力の根源は超能力とは別にある。

狙撃の才能はないものの、ある程度近づけば当てられる程に使い慣れている代物だ。

このまま相手を負傷させ、戦意を削いで殺さず黒川を助けに向かうことができるはずだ。

銃声が止んだ隙を突き、素早く間を詰めながら銃を撃ち続ける。相手の弾丸は気にせず、ただ一直線に道を通り進む。

左腕に衝撃と痛みを感じても、そのまま走る。反動はない。

(このまま、行けるッ！)

「ぐ……っ！」

何発当たっても動じない杉下に驚愕する白髪の少年。

杉下の銃から、横になぎ払うように撃ち出された熱の槍達が迫る。

回避するしかなくなった少年は反対側の壁まで避ける。

だがその瞬間こそが杉下の狙いだった。

杉下との間合いがほぼ無くなった時、少年はとっさに踏み込み銃を向けようとするが、それよりも先に杉下の左手が動いた。

全体重を乗せた杉下のアタッシューケースが、少年の腹部に叩きつけられる。

「ぐ、はぁッ!？」

肺の中の空気を吐き出しながら少年はその場に倒れ伏せた。
そのまま杉下は余裕を持って相手の頭部に銃を向け、少年が落とした得物を滑らすように蹴り飛ばした。

「おい……何で殺さない？」

「……頼むからこのまま退いてくれよ。それが無理ならアンタの上の人と交渉してもいい。アンタだって死にたくないだろうしオレも殺したくない。どっちもこのままじゃ損だろう？ 出来ないって言うのなら、足をわざわざ撃ち抜いて行く事になる」

予定どおり追い詰めた。ここまですればある程度折れてくれるだろう。そもそも、杉下には相手側が『観測猫』を狙うメリットがまったく分からない。

今さら『アレ』に、連れ去る価値や消す価値があるのだろうか。そこから考えれば、こちら側の危険度を認識させれば流れは変わるかもしれない。

効率よく、平和的に。

杉下が妥協を持ちかけたが、その言葉を聞いた少年の顔は諦めから不快そうなものに変わっていた。

「殺したく……ない？ ふざけんなよ……、」

杉下の救済の言葉は、彼にしてみれば侮辱だった。

両者の命を奪い合うやり取りだと思っていたのは、まさか自分の方だけだったのか。

武器を握っている事の意味も知らず、命を奪う勇氣もないようなこんな甘い人間に、自分は負けているのかと。

彼は今否定された。それなら反論すべきだ。奪う覚悟という意味を武力で理解させてやるべきだ。

身動きが取れないはずの少年は武器を振るった。

その武器は杉下の右腕の関節を、本来なら曲がらない方に折り曲げた。

「がッ、あぁッ？」

急激な痛みが動揺と重なり、杉下の思考は強制的に中断させられた。そのまま『視えない武器』は少年の意思どおり杉下を反対の壁まで突き飛ばし、叩きつける。

単純だが、超能力という武器はとても便利なものだ。

「なんだよ……殺さないって。なんでそんなに俺の前に立っただんだよ。おかしいだろお、なあ？」

転がっていた拳銃を拾いあげ、弾を装填し直し、杉下に向けて、引く。
パンツ、パンツ、と銃声が響き、その数だけ杉下の体がビクンッと震えた。

「今までずっとそうしてきたのか？ 一方的に相手を封殺して……数にでも頼ってたのかよ？ そんな自分のルールばっかでやってきたってなら甘すぎるだろ？ なぁ」

これが最後、頭部に狙いをつける。

「暗部ってのはこういう場所のはずだ。覚悟ってのはこういう意味だ。最初に言ったよな？ 文句なしって」

指を引いた少年は確信した。彼はこれで知っただろう。そしてもう、教えた意味も無くなった。

「そうか、アンタ、暗部だったのか……」

少年の幻聴なのか、死体になったはずのソレから声が聞こえたきがした。

振り返った少年は、ソレの体中から、血とは別のモノが流れていることに気が付いてしまった。

鈍い赤ではなく、暗闇のような黒が、傷口辺りからからこぼれ出ている。

「そうなら手足ぐらい、さっさと叩いておけばよかつたんだよなホント」

「……ふざけてるな」

「あーうん、確かに自分でもそう思う時もあるよ」

杉下は立ち上がった。その時にはもう穴があいた服以外、折れた右腕も含めて元の形に戻っている。

少年は初め、動じなかった理由が肉体再生などの能力の影響かと考えていたからだ。だからこそ、能力の要、演算に必要な脳を破壊した。

それが何故か、赤い髪の毛は、未だに死んでいない。驚愕というよりも、理解不能、理論矛盾という言葉が、今の彼を混乱させていた。

「何でだよ……おかしいだろ？ 演算の出来ないヤツがどうやって能力を使うってんだよッ!？」

その問いに、杉下はどこか遠くを見ているような顔で投げやりにごう答えた。

「『超能力』はそうだったな。だから、まあ、そうじゃない別の何かってことじゃないの?」

「別、だと?」

「説明してももきつと分かんないよ。『魔術』とかなんて誰も信じたりしないもん。まあ一緒にしたくないんだが、結果、『心臓派』も似たようなものだし」

「ま、じゅつ……?」

「そうだよな。最初から叩き潰してれば良かったんだ。何で一々気に掛けるんだらう……」

少年の疑問も無視して杉下は一人結論を探し始める。杉下の思考から配慮が消える。利己や効率だけが彼の選択肢として

浮上していく。

杉下の顔の皮膚に細かい裂け目が生まれ、一部が陶器のように剥がれだす。

その奥には先ほどと同じ輝きの無い黒が押し込められていた。

理性や常識、情や謙遜で固めた壁の境目から真っ黒な我欲が露出し
ている。

「覚悟つて何だよ？ オレは自分の領分にいるだけなのに。踏み込んだのは誰だ？ 飛び越えてきたお前だろ？ ここまで妥協して生きてるのに、どうしてまたオレから奪うんだよ」

「妥協？ 奪う？ ……だったらお前は、ここに何しに来たんだよ！？」

「……おかしいな？ オレはただ守りたいたけなのに。何でこれ以上失わないといけないんだよ？ ……おかしい、絶対におかしい」
留め金が壊れた杉下に言葉のキャッチボールは通用しない。もはや杉下の言葉は疑問ではなく一方的な否定に変わっていた。

白髪の少年はその守るといふ杉下の言葉で、双方が食い違っていることに気がついた。お互いがお互いのものを狙われている思っていたのだ。

敵は別にいる。

彼の目の前にいる赤髪の少年は、追いかけていた目標とは無関係で、むしろ同じ境遇なのかもしれない。

だが、今の彼は言葉で止まるようには到底見えない。

ギギギという歯車が擦れあう音が杉下の体の中から響く。それが起動の合図になり、彼の体から、皮膚や衣服を突き破り、幾つか腕が伸びる。

それを腕とは言いがたいほど歪で、長さも太さも、骨格でさえ適当だった。ただ先端が指のようになっていてだけ。

その手は何か物欲しそくに宙を掴もうと漂っており、杉下の瞳孔は光を当てられていないにもかかわらず収縮している。

『心在歯車オベルギア』という、武装した感情兵器がその矛先を少年に向けた。

ただ駆け足で迫ってくる杉下に対して白髪の少年はどうすることもできなかつた。

幾ら撃ち込んでも止まらない。また内側から吹き上がってくるだけ。『物体操作テレキネシス』で押し戻そうにもびくともしない。それ以上の力でまた押し返してくる。

だからといって背中を見せる事もできない。彼女を連れ帰るまでは。

「そんなゾンビみたいななりで、なにが殺したくないだよ……ただの化け物じゃねえかつ」

ハハッ、と笑う少年は立ち尽くす事しかできない。明らかに違う。

十分異質だと思っていた自分自身よりも、この怪物はさらに異質な存在だった。

ギチギチという鈍い音を発する杉下は少年の目の前で口を開いた。

「ああ、人間じゃない。でも、まあ、確かに心は在るよ。それが、オレの生きてる証明なんだから」

とりあえず主張しておいた。いや主張ではなく自分は兵器ではないという再確認なのだろう。

生と死の狭間を彷徨う怪物は一番大きな黒い腕で少年の頭を掴んだ。そして残り腕で少年の手足を押さえ、そのまま吊り上げる。

後のことは考えずただ掴んでみた。そうするべきだと思ったから。ならここからどうするか。握りつぶすか。壁に叩きつけるか。とにかく動かなくなればそれでいい。

「ウ、グウ……ッ」

「どうすればいいだろう？ まあ何でもいいや」

とりあえずさつき自分が投げつけられた場所に適当に投げ飛ばす。振り回された少年は車に跳ねられたように吹き飛び、杉下の時とは比にならない威力で壁に激突した。

「……ああ……」

瑞希だ、と杉下は思い出す。目的はこんなことじゃなく瑞希だ。瑞希を探さないといけない。

今すぐ瑞希のところに行かなければならない。瑞希を連れ戻さないといけない。

こんなどうでもいい事をしている場合ではなかった。瑞希という目的が、いつの間にか逸れてしまっているではないか。彼の思考はすぐさま目的を再設定する。

「うえ、があ、ああ、……はっ、ああクソッ」

杉下の予想を裏切り少年はまだ動いていた。杉下そういえば念動力系だったなと思ひ返し、衝撃を瞬時に緩和したんだらうと推測できた。

「……おい、お前。……こんな事、してる場合じゃ、ないぞ」

「ああそうだよな。もう一人いるもんな。だからそこで適当に寝といてくれ」

「……青い、円盤」

「あ？」

「お前、関係者じゃないな？」

「……まさか、そっちも追ってたのか？」

円盤というキーワードで杉下の疑問は解消された。目の前の少年の言葉と金髪の少女の言葉を繋げば理解できる。

青い円盤を調べているのが自分だけとは限らない。というより、逆にその方が不自然だ。この縦割りの世界で情報の共有など出来るわけがない。

向こうも独自に調べていたというならば、連れを安全な場所に置いて、それを探しに来たというならこの構図も納得できる。

そしてこの緊張感と互いに握られた銃。狙われる側の心理が裏目に出ってしまったということだろうか。

杉下の極端な憤慨が変化し、相手を傷つけた後悔よりも無駄な時間

の消費という焦燥の方が強く湧き上がってきている。

武器として機能していた我欲に、様々な感情が交じり合い、攻撃性が薄れ始めた。

混乱同士が絡み合い、また予定が狂った。また手順が壊れた。

それでもなお杉下の体は黒に染まり、腕は消えるどころか増えている。

まだ、喪失への不安という杉下の我欲の本質が、自身の核が刺激されて続けている。

「待てよ……。じゃあ、アンタ達は瑞希と関係ないのか……？」

その時、静まり返った通路に、タタンツタツ、という不規則な足音が響いてきた。

黒髪の色々薄い少女、黒川瑞希は、金髪の色々大きい少女、アシュリー・ヘンブリーと共に走る。それを追う青い円盤から逃げるために。

「道を塞いでラクラク突破とか思ってたら何でこんな事に!？」

「あの円盤は単体でも動けるの! 多分隙間を縫ってきたんじゃない!？」

とにかく真っ直ぐ走り続ける二人だが、着実に差は縮まっていく。追いつかれることを悟ったアシュリーは後ろを振り向き能力で通路

に黄色い透明な柱を進入禁止のテープのように、張り巡らせた。だが円盤は多少かすり、青い光を振りまきながらも間を見つけては止まらず進み続ける。

「なあークソツ！ 何であんなに器用なのよ！？ ミズキツ！ さっきのは出来ないのぉー！？」

「やれって言われて出来るわけじゃないんだって！ ……てゆーか疲れたツ！ 走るので限界っ！」

「っなああもぉーッ！！！」

叫びながらも能力を振るうアシュリー。やらないよりは相手の速度を落とせているので手を止めるわけにはいかない。

「おおっ！？ 前に誰がいる！」

「……誰？」

二人の視界の先には少年が二人いる。一人は白髪の少年で壁に倒れ掛かっている。もう一人の黒い誰かはこちらに近づいてきている。そちら側を見ていた一瞬、円盤が蓄積されていた『念動能力』で老朽化した天井パネルを引きちぎり、落とした。

「ちょ、まッ！？」

アシユはそのまま前に飛び込むが黒川は思わず立ち止まってしまっ。そのまま落ちてきたものの風圧で彼女は後ろに押し込まれた。

円盤は黒川の頭上まで来ると、縁から飴細工のように伸び出た三脚の槍がそのまま地面を割って突き刺さった。

「あつ」

黒川の本能は、それが動くなという警告だと理解した。そしてそれは危機が頂点に達したのだとも遅れて黒川は感じ取れていた。

彼女の視界が青一色で覆われていたが、それは長くはなかった。視界の青は、黒に塗り潰された。影ではなく、陰陽の無い黒。

「返してくれよ。」

メキメキツ！という何かがへし折れるような音。赤い髪の毛、人畜無害な兎に見えるクラスメイトの声。

よく見ると黒は少年の腕だった。だが手は円盤を飲むほど大きい。前を見ると、杉下は肩から先は無理やり違う部品をパツはめ込んだように変形していた。

「すぎした？ どうしたの……そのて……？」

「大丈夫。 みい、……黒川、怪我、してないよな？」

腕だけではなかった。体の至る所が、粉碎されたように欠けていた。髪の毛も、一部黒く変色している。

「私は大丈夫だけど……杉下、怪我じゃない、能力？」

「ああ」

返答した杉下の腕の表面は、高速で風化していく地表のように空気

に溶けて、そのまま元の大きさに戻っていった。それでも未だに肌の色は現れていない。ただ呆然と突っ立っているだけだった杉下の口からポツリと言葉が漏れた。

「もう何も来ないよな？ ……大丈夫だよな？」

震える声のまま、円盤がいた方見て固まっている杉下。黒川にはそれが「大丈夫」には見えなかった。

「……杉下、何があったの？ それに後ろの人は……」

黒川が杉下の後ろを見ると、少し離れた場所でアシュリーが白髪の少年をぐわんぐあんと揺さぶっていた。

「どうしたのよ！？ アンタ血がっ！ 吐血なの！？」

「うるさい。別に……口切っただけだし。骨はどうなってるか知らんが」

「ていうか何やらかしたの？ 円盤は出てくるわアンタボコボコになってるわで訳わかんない！ 今期最大のピンチってヤツ！？」

「ちよつと揉めただけだったのに。はあ、今日はもう服屋には行かない……一人で行ってくれ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？ サッサと帰るに決まってるじゃない！」

ゆっくりと壁を支えに立ち上がる少年を、アシュリーはすぐさま肩で支えた。

少年は虚ろな杉下を見て、顔をしかめた。

「杉下、だっけ……。……今回はお互い無し、だ。文句でもあつたらまたにしてくれ」

「えっと、なんだか分かんないけどゴメンねミスキ！今日はさっさとコイツ連れて帰らないと！」

「うん。じゃあ」

軽く手を振った黒川だったが心の中は気が気でない。すぐに立ち上がり杉下の肩を軽く掴んだ。

「杉下、何でそんな顔してるの？」

「何でもない」

「何でもないように見えないから言ってるのよ？」

「……………」

それでも杉下は答えない。

「もしかして、杉下は私が狙われてたの、知ってたの？」

押し黙る杉下に黒川は真剣な表情で念を押して、もう一度尋ねる。

「……嘘を付くのは苦手だし、好きじゃない。いつか話すから、今は……………」

どこかぎこちなく、無理やり紡いだように話す杉下。黒川には彼が今悩み、苦しんでいるのが簡単に見て取れる。

「そっか。分かった。また後で、言えそうな時に教えて。待ってるから」

そう優しく微笑みながら、無意識に杉下の手を強く握っていた黒川。

「じゃあ、今はどうすればいい？」

「車に、とりあえず車に乗ってくれ。家まで送るから」

「分かった。でも行くのは杉下の家にして。そこで落ち着いたら私も話すから」

手を引いて歩き出した黒川だったが、その手の中では、杉下から少し抵抗感のようなものが伝わってくる。

まるで何かに怯えているように、彼の手は震えていた。

武装した感情論（後書き）

最後まで読んでくださるなんて、すごい忍耐力です！
ありがとうございます。

杉下の能力、なんだこれって思われたでしょうが、高位の『肉体変化』と思って頂ければ問題ないです。完璧オリなんで差支えないです。

次回過去を振り返るのでその時にさらっと流してみます。

ちなみに黒い杉下を描いたのでよかつたら見てください。

<http://4121.mitemin.net/i37300/>

あなたがくれたのは私の心（前書き）

どうもです。

今回は過去編ということで。ずっとアプローチの方法を模索して
きました。

未熟者ですが今後も宜しくお願いします。

あなたがくれたのは私の心

〈とある狭間の観測黒猫〉

この世界には、物理学では現す事のできないような現象を引き起こす方法が存在する。

例えば魔術。それは異次元の法則を無理やり現実に適用し超常現象を引き起こす。

つまり、世界の中に複数の次元が重なり合い存在することになるのだ。

その中の一つとして、魔術とは別位相に存在するのが、『心在学派』。

それは質量からなる現実とは別に精神で構築される次元、つまり魂の存在、それを肯定する人間や組織の事を指している。

杉下はそれをよく知っていた。なぜなら彼はそういった人間達によって造り出された殺戮兵器だからだ。

世界が重なっているせいなのか、一定の記号によって干渉を受けた精神世界のエネルギーには、現実の熱、光、音や質量の代役を果たす性質がある。

そして『心在齒車オベルギア』である杉下の体も代用品。血肉は黒く、内臓はある程度省略され、心臓があるべき場所にはどの時代のどの国にもない文字を刻みこんだ鉄塊のような箱が埋まっている。破損しても、いくらでも再生できるのは、記号によって作製された

設計図に、大量に蓄積されたエネルギーを沿らせる、つまり常に一定の型に流し込んでいるからだ。

記憶が確かな時にはすでにそうなっていた。この知識も元からすでに知っていたのだ。

彼の体はすでに身体能力のピークである高校生程度に仕立て上げられていたものの、精神はまだ中学生程度。

ある程度の常識というものを無理やり詰め込まれているような違和感が絶えず心を廻っていた。

自分が誰なのかも分からない。気がつけば白い部屋で寝ていた。

だがそこに居たのも長くはなかった。真っ白な部屋に慣れる間もなく、杉下は金髪の青年によって外に連れ出された。

空っぽなままだだ流されるように従ってた彼に、青年は笑顔でこう言った。

「俺の名前は杉下 夏樹^{ナツキ}。君は俺の弟で、名前は杉下光輝。光輝^{ミツキ}。いい名前でしょ？」

自身の兄を名乗る人物と共に、色々な場所を巡り、様々な知識を与えられた。様々な世界を教えてくれた。

ただ杉下には兄という実感が理解できないでいた。二人だけでは違和感が変わらなかった。

終着地点として、光輝は学園都市という日本から独立した巨大な教育機関にたどり着いた。

周囲は高い壁に囲まれ、中には、二百三十万人のもの住人。その八割が学生である。

そこでは記録術や暗記術と称し、投薬や催眠暗示を用いて学生の脳を刺激し、超能力を開発していた。

そんな街に、彼らを招き入れたのが、『オーナー』という人物だ。その人は学園都市統括理事会の一人で、この地に十二人しかいない最高権力者であった。

主な活動は、様々な方向からの開発や、卒業生を利用した事業経営の管理など。一番有名なのは幼、小、中、高、大すべてが揃った『明星学園』の理事長だという事だろう。

夏樹と光輝はそんな彼に、特別な能力者の護衛を依頼したのだ。

それが杉下光輝と黒川瑞希の最初の出会いだった。

今から六年前、杉下が学園都市の説明をある程度受け、護衛を始めた最初の日の事。

色んな人との挨拶を済ませ、車に乗って明星学園を目指していた。ちなみに運転技術は外にいた時にすでに取得しているので問題ない。

杉下が運転する車の中には明星小学校の制服の着た高学年ぐらいの少女二人が座っていた。彼女達二人と今後行動を共にする。

運転席のとなり、助手席の少女は長い黒髪を高めでポニーテールにして束ねて、整った輪郭を強調している。

幼いながらも綺麗な顔立ちで、初対面の杉下は純粹で明るい印象を受けた。彼女の名前が黒川瑞希。

後ろの三人席で横になっているもう一人は、厚みのある長い黒髪を肩まで伸ばし、目の上で真っ直ぐに切り揃えられている少女。

和服を着た重い雰囲気日本人形を、愛らしさを前面に押し出した今風の模型人形に作り直せば、このような姿になるのだろう。こちらの少女は水瓶和だ。ミエカンドカ

ちなみに彼女は現在睡眠中。

「なあ黒川。『観測猫』って何なんだ？ 何に狙われてるんだ？」

最初に口を開いたのは杉下だった。普通の超能力とは何が違うのか。守れと言われても敵が分からない。

「簡単に言えば制御役かな。狙うのはそれを良しとしない人たち」

外見差はあるものの、黒川には実際それほど年齢差が無いことも伝えていた。黒川はただ簡単に自分を一言にまとめる。

「制御役？」

「何年前に、『一方通行アクセラレータ』っていう『超能力者レベル5』が暴走したの」

疑問に答えた黒川の言葉の中に、杉下が最近聞いたばかり人物の名前があった。

それはこの街の最高位の能力者、七人しかいない『超能力者』の一人にして、最強の二つ名。

体に触れたありとあらゆる物を反射し、核でさえ受けつけないという怪物だという話を杉下は聞いていた。

そんな力の持ち主が暴れまわれば誰も抑えることはできないだろう。

「その教訓を生かして、学園都市が躍起になって開発しているのが私たち。超能力を管理する超能力。当然それが気に喰わない人もいるわ」

「よく分からないな。歯止めを掛けるやつがいて何が気に喰わないんだ？」

「権力がそこに集中するからよ」

「……………」

杉下はその冷めた発言に言葉を詰まらせた。

強制的に自我がある程度確立させられていた自分よりも、まだ中学生にもなっていない少女が、こんなにも賢いものなのかと。

それとも、こんな知識を持つ事を強制されているのか。

「実際明星は『観測猫』を独占しているわ。黒の私の他に、白と赤。オーナーが統括理事会の一人になれたのもそれが理由なんだと思う」

「だからわざわざ護衛をつけられてるのか。利益を守るために」

杉下は苦い表情で呟いた。

正直、オーナーという人物を知らない杉下は腹が立った。子供を危険に晒してでも利権を得ている汚い大人。そんな印象を受けた。

そんな杉下の表情を見て、黒川は慌てて彼の思考を訂正する。

「違うの。私たちは元々『置き去りチャイルドエラー』だったから。オーナーは私たちを育てるために施設を作って開発をしてくれる」

黒川曰く、利益はすべて子供達のためで、『観測猫』はそれを維持するための象徴になっているらしい。

明星の成り立ちは、『置き去り』という、親から見捨てられ、学園都市にも見放され、そんな居場所を失った子供達を引き取っていた一施設、そこから少しずつ拡大していったのが今の明星だと黒川は言葉を加えた。

「それでも黒川が狙われるのはおかしいだろ？ 大人の金の問題なんて、……ここは子供の街じゃないのか」

聞いていた話と少しズレがあった。黒川の話には複雑な大人の欲が絡んでいる。

大きな力を生み出し、今度はそれを管理する力が必要になった。その過程も少しおかしい気もするが、超能力を開発するというこの街の方向性が杉下に理解できない。

とにかく『観測猫』というのはこの街で価値あるものなのだろう。杉下はそれだけ理解できた。

「だから、杉下には一緒に私たちの居場所を、家族を守ってほしいの」

暖かく、優しい笑顔。自分が危険だということにこころも他人のことを考えれるものなのか。

家族とは、そんなに素晴らしいものなのか。

「ああ」

彼女の語る家族を知りたい。そしてこの少女の笑顔のそばにいたい。空っぽな杉下の中に初めて我欲が生まれた。

出会いから二年が経ち、黒川が明星中学に進学し、杉下も同時に入学した。

だが杉下の身体は高校生。そこには確かな違和感があり、入学当初級友達からは怪訝な顔で見られたのは当然だろう。

放課後、中学の屋上で何もせずただ沈んでいく夕日を見ていた杉下は入学したことを少々後悔していた。

「大丈夫！　すぐに慣れるって。　私なんか三日で光輝に慣れたもの」

後ろから黒川の励ます笑い声が聞こえた杉下はおもわず肩をビクツと振るわせた。

「それもあるんだけどさ。……なんか、ねえ？」

「？」

「瑞希はどんどん大きくなっていくのに、オレは全く変わらない」

杉下は最近まで、自分が『心在齒車』だということを忘れていた。戦いという戦いもなく、ただ普通に運送業を手伝う一学生として二年間過ごしているうちに、自分にも家族が出来た。

黒川達と兄弟のように一つ屋根の下で過ごし、先輩達は弟のように扱ってくれた。

まるで組織全体が家族のよう。仲良しごっこ、傷の舐め合いと陰口を叩く者もいたが気にはならなかった。

空っぽが埋まっていく実感が、幸福というもの。この笑顔に囲まれて生きていたい。それが人生の目標になっていた。

だが、自分は人ではない。

文字どおり血も涙もない怪物。生と死を曖昧にされた亡霊。すべてが作り物で、この学園都市に似つかわしい非科学^{オカルト}。

このままでいいのかわからない。そもそも自分が死なないというなら、この幸せはいつまで続くだろうか。

このころから杉下の心に不安が、幸せを得た分、失うという恐怖が

付きまとい始めていた。

自身の死が無い杉下にとってそれは一番の不安要素となった。

「光輝だって変わったよ。最初はすごく冷たい感じだったのにさ、今はいーっぱい笑うようになった。みんな光輝を頼りにしてるのよ?」

皆そう言ってくれる。だが、冷たい自分の体は人間との違いを明確に提示している。これを生ではないと述べている。

「前も言ったけど、オレは兵器なんだ。信じれないとは思っけどさ。生きてるのか死んでるのかも分からない。オレには自分が未だに分からない」

殺すために造られたという自分の正しい場所、定義、法則はなんだったのか。生みの親も知らなければ、最初から人間ではなかったのかもしれない。

「光輝は生きてるよ。 私が保障する」

「……何でそう言えるんだよ?」

笑顔のまま、彼女はゆっくりとこう言った。

「杉下には心があるでしょう? いつも皆の事を一番に考えてる。そんな優しい光輝ならきつとあるよ。誰かを大事に出来るならそれは心を知ってるってことなんだよ。それは絶対生きてる証明なんだって私は胸を張ってそう言える」

「瑞希……」

彼女が証明してくれた。定義を、法則を、意味を証明してくれた。だから守りたい。大切な彼女を守りたい。大切な家族を守りたい。

「……ありがとう」

あなたがいれば、きっと怖いものも乗り越えられると思うから。だからずっと一緒にいて欲しい。別れが少しでも遠くであるように。

この気持ちをどう呼べばいいのか、無知な杉下は知らない。

ただ、そんな杉下に別れが来るのは早かった。

杉下の前に一人の青年が現れたのがすべての元凶だったのかも知れない。

だがそれは一生誰にも分からないことだ。

赤と白を守る青年は出会ってすぐに杉下達に語ってみせた。

「俺と一緒に世界を平和にしに行かないか？」

この一言に魅入られた人間の数は多い。事実杉下や多くの人間が彼の目指す未来に賛同した。

彼がいなければ明星はここまで拡大しなかっただろう。

そして彼の学生運動がなければ、あんな悲劇は起きなかつただろう。

『振動破壊。パイルドライブ』という『超能力者レベル5』の青年、
信濃涼。シナリオヨウ

英雄と呼ばれた男の死は、たしかに世界を大きく狂わせたに違いない。

三年前の悲劇が明星を、学園都市を変えた。

あなたがくれたのは私の心（後書き）

どうでしたか？

長ったらしくなるので能力や設定はあまり詳しく書いていません。
とりあえず杉下の執着する理由が伝われば幸いです。

そろそろ瑞希の空白の理由が分かった人もいると思いますがそこは
心の中に留めておいてください。

また次回も過去ですが見て頂けると嬉しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783y/>

とある狭間の観測黒猫

2011年12月28日00時49分発行